

---

# 七つの宮～六番目の妃～

沢井 紗矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七つの宮ゝ六番目の妃

### 【Nコード】

N4937BA

### 【作者名】

沢井 紗矢

### 【あらすじ】

大国エザリアの後宮 別名七つの宮。

若き国王クラウスの正妃を選ぶ為、六人の若い女達が集められる。

六番目の正妃候補に選ばれたりゼは、初恋を諦め生まれ育った平和なサランの里を旅立った。



## 旅立ち

「王に一番愛された女性が、正妃様になれるのよ。そして一ノ宮……別名輝きの宮を与えられる……女として最高の幸せだね」

目の前で、うつとりと七つの宮について語る幼なじみの姿に、リゼは不満そうに眉をひそめた。

「その話なら何度も聞いてよく知ってるわ。と言うよりこのエザリア国の人間なら誰だって知ってる事でしょ？」

うんざりと言うリゼに、ミアは呆れたように目を丸くしてみせた。

「それなら王宮からの通達……七ノ宮に入れの意味が分かるでしょ？ リゼは正妃候補に選ばれたんだよ。

七ノ宮に住んで正妃様に成る為頑張ってる事、凄い名誉な事なのに何でもっと喜ばないの？」

「単純に喜べる訳ないでしょ？ ミアは他のお妃候補について知ってるの？」

難しい顔をして言うリゼに、ミアはキョトンとした表情で首を傾げた。

「知らないけど……」

「……私以外の正妃候補5人は、皆特別な方達だそうよ……候補になっても不思議じゃないような人達で、私だけが皆と違うの……ミアはおかしいと思わない？　なんで平凡な私が選ばれたと思うの？」

リゼがそうまくし立てると、ミアは困ったように、眉根を寄せた。しばらく考えた後、ミアはニコリと微笑みながら答えた。

「リゼが綺麗だからじゃないかな？　この里で一番綺麗ってみんな言ってるし、勉強も出来るし、弓も上手でしょ？」

気楽な調子の幼なじみの言葉に、リゼは内心溜め息を吐いた。

そんな事くらいで、王の妃候補に選ばれる訳がない。

都に行けば、自分より美しい女性はいくらでもいるし、教養も武術も上には上がいる。

やはり、他に何か思惑が有って選ばれたとしか思えなかった。

でも、それが何なのか知るすべは無く、リゼを憂鬱な気持ちにさせ

た。

ミアとは違い元々、七つの宮になんて興味は無い。

煌びやかな物語にされているけれど、実際はただの王の後宮だと知っている。

後宮が七つの建物に別れているというだけ。

そんなところに幸せが有るとは思えないし、会った事も無い王の寵愛を、多くの女性と競いたいとは思えなかった。

当然、名誉な事だなんて思えない。王の後宮になど入りたくない。

でも、自分の気持ちが考慮されない事は分かっている。

王宮からの命令は絶対で、逆らえば自分だけでなく家族や……下手したら、このサランの里の皆にも罰が下る。

納得がいなくても、不安でも、何もかも諦めて行くしかなかった。

「リゼ……本当に元気無いね……」

ミアが心配そうに、顔を覗き込んで来る。

「……この里を離れるのは、やっぱり寂しいし辛い……ミアにも滅多に会えなくなるだろうし」

漠然とした不安を伝える事を諦め、もう一つの憂鬱の理由を言う。

今度はミアも納得したようだった。

悲しそうに目を伏せる。

「それは……そうだね。ごめん、私浮かれていてそういう事考えて無かった」

「謝らなくていいけど……でも本当に寂しいね……」

「私達子供の頃からずっと一緒だったのにね……リゼと私とカイ……三人でいつも一緒だった」

カイ

ミアが何の他意も無く口にしたその名前に、リゼの心臓は大きく跳ねた。

「リゼ、どうかした？」

顔に出てしまったのか、ミアが怪訝そうに聞いて来る。

「何でもない」

そう答えながらも、頭に浮かんだもう一人の幼なじみの姿は、焼き付いたようになかなか消える事は無かった。ミアが帰ると、入れ替わるようなタイミングでカイが訪ねて来た。

「リゼ、話は聞いたよ」

カイは、リゼの顔を見るなり言った。

「ミアもカイも流石に情報が早いね」

リゼは、苦笑いを浮かべながら答えた。



リゼ達、幼なじみ三人の親は里の代表を務めている。

その関係で幼い頃から一緒に育ったし、一般には知らされない話も知る事が出来る。

まだ公表されていない、リゼの後宮入りを知っているのもその為だった。

「いつ発つんだ？」

机を挟んで、リゼの正面に座ったカイが言った。

「2日後……何の支度も要らないからすぐに七ノ宮に入れとの命令なの」

「そうか……ずいぶん急だな」

カイは難しい顔をして、何か考えるように口を閉ざす。

その様子はミアの様に、手放して喜んでいるようには見えなかった。

「カイ……私が六人目の候補にされたのはなぜだと思う？」

カイなら何か有意義な答えをくれる様な気がして、聞いてみる。

カイは浮かない表情でリゼを見つめて来た。

「分からない……はっきり言うと、リゼが選ばれる理由が思いつかない」

「やっぱり……そうだよね」

ミアとは違い、カイは現実的だった。

幸運だと捉えるよりも、不自然さが気にかかるようで、釈然としない気持ちでいるようだった。「王都から遠く離れた小さな里の娘を妃候補にするなんて、不自然過ぎる。王家になんのメリットも無い。それどころか、このサランの里の人間は元々は他国の人間で、国への忠誠心も薄いのに」

カイは険しい表情で言いながら、リゼを見つめた。

「……私もそう思って、お父さんにも聞いたけどろくな返事は返っ

て来なかった。とにかく命令に従うしかないだろうって」

「そうか……」

カイは少し苛立ったように目を細くした。

仕方ないとは分かっているけど、王家の強引さに腹を立てているようだった。

こっという反応も、この里特有のものなのかもしれない。

王家を崇拝する心の希薄さ。

それは幼い頃からの教育のせいでもあった。

リゼ達が産まれる前、このサランの里は違う国の領土だった。

けれど、エザリア国との戦いに敗れ、王家は滅び小さな国土も民も、そしてサランの里も全てエザリアのものになった。

この里に住むのは亡国の民とその子供達。

エザリア王家を無条件に崇拝する気には、決してならない。

ミアにしたって、華やかな物語のような世界に憧れているだけで、本質的にはリゼ達と変わらないはずだった。

ただ……それでも、大きな力には反抗出来ない。

リゼもカイも、それがよく分かっていた。2日後。

王宮からの使者の先導で、リゼは生まれ育ったサランの里を旅立とうとしていた。

両親との別れの挨拶を交わしていると、カイとミアが見送りにやって来てくれた。

「リゼ、元気でね……身体に気をつけて。いつか王都に遊びに行くから」

泣きながら言うミアに、リゼは使者に聞こえないような小声で応えた。

「その前に追い出されて、すぐに戻ってくるかもしれないわ」

「リゼったら……」

ポロポロと泣くミアを気にしながら、リゼはカイに目を向け微笑んだ。

「カイも元気だね」

「ああ……リゼも元気で」

使者の目を気にしてか、カイは一定の距離を開け、それ以上リゼに近づく事はなく言った。

それから、隣で小刻みに震えて泣くミアの肩に、慰めるように腕を回した。

「……では、行ってまいります」

寄り添うカイとミアの姿に少しの胸の痛みを感じながら、リゼは身を翻し用意されていた馬車に乗り込んだ。

心の中で、18年間過ごしたこの里と……それから決して口に出来  
なかった、淡い初恋に別れを告げながら。

## 旅路

田園風景が広がる中にある先が見通せない程続いて行く長い道を、馬車に揺られて進んで行く。

「あと少しで街に着きます。今日はそこに宿をとります」

揺れに身を任せながら、ぼんやりと窓の外に目を遣っていたリゼに、斜向かいに座っていた使者の女性が声をかけて来た。

「……はい」

予想していた事だから、大した反応も見せずに頷いた。

使者はそれ以上何かを言う事はなく、口を閉ざす。

そして手元の書類に視線を落とすと、リゼなど居ないかの様にそれらを読む事に没頭していった。

真面目そのものといった使者の女性を、リゼはさり気なく観察した。

年はリゼより10才以上、上に見える。

濃紺を基調とした衣装を身にまとい、黒く、恐らく腰まで有ると思われる長い髪をきつちりとまとめ上げている。

名前は確か……ソフィアと言っていた。

同じ馬車に乗ってる事からも、王宮からの迎えの数人の内で一番立場が上だと思われた。

何か質問するなら彼女が適任だと思う。

けれど、ソフィアから発せられる固く厳しい雰囲気、先程からリゼが口を開く事を躊躇わせていた。

「……」

結局、質問は諦めて何も言わずに再び窓の外に目を向けようとした。  
「何かございますか？」

ソフィアから目をそらしたのほとんど同時に言われ、リゼはビクッと身体を強張らせた。



ゆっくりと視線を戻すと、ソフィアは書類の束を膝の上に置きリゼをじっと見つめていた。

「あの……」

正面から見据えられ、戸惑いを感じていると、ソフィアは表情を変えずに言った。

「何か、お話が有る様に感じたのですが」

「あ……」

様子を窺っていた事を見抜かれていた。

気まずさを感じながらも、せっかく話を振ってくれたのだから気がかりな事を聞く事にした。

「聞きたい事が沢山有るのですが、今言ってもいいですか？」

一応気を使い、書類に目を遣りながら言う。

「はい、何でしょうか？」

生真面目に答えるソフィアに、リゼは頭の中で質問をまとめながら言った。

「王宮から私への指示は、至急七ノ宮に入れという事でしたが、他の候補の方はもう到着してるのですか？」

ソフィアは姿勢を正しながら答えた。

「はい、他の候補の方は皆様、都にお住まいですので今頃指示された宮に入られているはずです。

空いているのは正妃様のみが入れる一ノ宮と、それからリゼ様の入る七ノ宮だけです」

「そうですよね……他の方は、都でも有名だと聞きました……詳しい事は知りませんが……」

やはり、どう考えても自分だけが異質だった。「あの……今回は後宮に入る女性を一斉に集めているようですが、なぜなんですか？」

後宮に、正妃以外の妾妃が何人も居るのは珍しい事じゃない。

でも今回のように、同時期に六人まとめて集めるなんて聞いた事が無いと、里で別れた母も言っていた。

「国王クラウド陛下は即位して一年になりますが未だ正妃、妾妃共に不在です。

お世継ぎの事などを考えても一刻も早くお妃を迎えなくてはなりません。その為に必要な事なのです」

ソフィアの言葉に、リゼは不自然さを感じて眉をひそめた。

「……何か？」

それに気付いたソフィアが、問いかけて来る。

「いえ……陛下にお妃が一人も居なかったなんて、思いもしなかったものだから」

国王クラウドは今年で、22歳になったと聞いている。

健康で若い　しかも身分高い王族の男性に、女性の存在が無かったなんて信じられなかった。

（身分違いの恋人がいるとか？）

一瞬浮かんだ考えを、けれどリゼはすぐに打ち消した。

そうだとしたら、わざわざ何の身分も無い自分がサランから呼び寄せられる訳が無い。

（王には何か、一般には知らされていない問題が有るのかもしれない）

疑問は尽きなかったけれど、ソフィアがそれ以上詳しい事を語ってくれる事はなかった。王都への旅は、ソフィアや他の従者が細心の気配りをしてくれた為快適だった。

サランの里から出た事の無かったリゼにとっては、何もかもが珍しく新鮮に映り、あつという間の行程だった。

「リゼ様、そろそろエザリアの王都です」

朝から馬車に揺られ、さすがに疲れが出て来た頃、ソフィアがリゼに向かい言った。

リゼは緊張しながら、窓の外に目を遣った。

遂に王都に着いてしまった。

不安ばかりの後宮生活が始まるうと思っていると思うと、胸が苦しくなる思いだった。

対象的に、ソフィアはいつもよりも寛いだ様子で、柔らかな表情を窓の外の景色に向けていた。

「ちょうど日の入りの時間ですね。

リゼ様ご覧ください、あの丘の上に建つのが王城です」

ソフィアの視線を追ったりゼは、その先に広がる光景に息をのんだ。

丘の上に建つ王城が、夕日で朱に染まっていた。

背後を大きな山々に囲まれた、遠目からでもはっきりと分かる程巨大な建物。

サランの里が丸々収まっても、余りあるような。

（あれが王城……あのどこかに七つの宮が……）

想像していた以上の光景に圧倒される。

王城から、いつまでも目が離せなかった。城に近付くにつれ、その巨大さと荘厳さをより強く実感した。

城下の街に入ってから城までの距離も、想像以上だった。

馬車から降りる事は禁じられていたけれど、間もなく夜になるというのに、静まる事なく活気づいている街の様子は伝わって来た。

大通りを貴族の馬車が通る事など珍しくないのか、護衛を連れているリゼ達一行が特に目を引く事も無いようだった。

注目される事も、邪魔される事もないまま、馬車はゆるやかな坂を上り順調に城に向かう。

城と街の間には幾重もの大きな門があり、屈強そうな兵士たちが守りにっている。

リゼの馬車はどこでも止められる事はなく、最奥の門にたどり着いた。

静かに馬車が止まると、リゼは落ち着き無く視線をさまよわせた。

ここで下りるのかと思ったけれど、ソフィアが動く様子はない。

「……到着したんじゃないんですか？」

黙っていらなくなり聞いた途端に、馬車が再び動き出した。

「このまま後宮の門まで進みます。ここからは本当に城の内部ですので検問が厳しくなっているのでお待ち頂きました」

「そうなんですか……」

余裕も落ち着も無い自分が、恥ずかしくなる。

気まずい思いになりながら、リゼはソフィアに気付かれないように小さな息を吐いた。馬車が止まると、今度は直ぐに外側から扉が開いた。

「リゼ様、ここからは徒歩になります」

ソフィアが先に降り立ち、リゼが降りるのを助けながら言った。

「はい」

さり気なく辺りを見回しながら答える。

少し先に、リゼ一人ではとても開く事が出来ないような、大きな両開きの金の扉が有った。

「後宮……七つの宮へ続く門です。あの門を通る事の出来る人間は限られています」

リゼの視線を追ったソフィアが、説明するように言った。

「あれが……後宮への出入り口は他には無いのですか？」

扉を守るように立つ、多数の兵士に目を遣りながら言うと、ソフィアは一瞬躊躇った後、頷いた。



「そうです。ですから後宮に不審な人間が出入りする事は有りません。城の中でも特に厳重に守られた場所です……では参りましょう」

ソフィアはリゼを促すように言うと、黄金の扉に向い進んだ。

リゼも後に続いて行く。

ソフィアと衛兵の間での短いやり取りが終わると、黄金の扉が音をたてゆつくりと開かれた。

機械仕掛けの扉は、完全に開くと動きを止めた。

（やっぱり人の力では開けないんだ）

ソフィアに連れられ扉の奥に進んでいく。

リゼが完全に後宮側に入ると、扉が再び動き出した。

（守られているというより、閉じ込められてるみたい……）

頭の隅でそんな事を考えながら、扉が完全に閉まるのを見届けた。

黄金の門の間近にまで、後宮の女官数人が出迎えに来ていた。

女官達は腰を折り頭を下げ、リゼに歓迎の挨拶をした。

「これより、七ノ宮にご案内致します」

女官の先導で、長い廊下を歩き出す。

廊下の先にはもう一つ扉が有った。

先程の金の扉より、二回り以上は小さな両開きの銀の扉。

女官二人が左右に別れ、扉を開いた。

その瞬間、空気が変わったような気がした。

僅かに風が流れて来るのを感じた。

それから、ほのかな花の香り。

「……」

足を進めると、扉の先には美しい庭園が広がっていた。

その緑の中を、左右に回廊が伸びている。

左側の回廊の先に、白銀に輝く美しい宮が見えた。

「もしかして、あれが一ノ宮？」

それ程大きな建物ではないのに、遠目にもその繊細な美しさを感じられる。

宮の周りを、柔らかな光が包んでいるようだった。「はい、正妃様の為の宮、一ノ宮です」

「……本当に輝いているんですね」

感嘆のため息を吐きながら言う。

話に聞いていた通りの一ノ宮の美しさに、見とれてしまう。

立ち尽くしているリゼに、ソフィアが声をかけて来た。

「リゼ様、七ノ宮にご案内致します」

「あつ、はい」

我に返ったような気持ちになり、ソフィア達の方に身体を向けた。

「こちらです」

女官は、一ノ宮とは逆の右の回廊に足を進めた。

「こちらの回廊が、二ノ宮から七ノ宮へと順に続いています」

「……では、七ノ宮は門から一番遠くに有るという事ですよね」

不作法にならない程度に辺りを見回しながら言う。

「はい、その通りでございます」

音を立てずに進みながら答える女官に、リゼはもう一つの疑問を口にした。

「王の宮はどこに有るのですか？」

「……え？」

女官ははじめて表情を変え、怪訝そうな視線をソフィアに送った。

ソフィアは足を止めてリゼに向き合つと、ゆっくりとした口調で言った。

「王の住まいは後宮の中には有りません。先程通った黄金の門の外側にあります」

「えっ？ でも……七つの宮は王の宮殿を囲うように建っているって……」

ミアもそう言つて、憧れのような気持ちを持っていた。リゼの言葉に、ソフィアは苦笑いのような表情を浮かべた。

「そのような物語が有る事は知っていますが、実際は違います。後宮は王の宮から門で隔たれた北に位置しています。

七つの宮の配置は複雑で王の宮を囲むようにと言つ訳ではありませんん」

「……そうですか……ごめんなさい変な事を聞いて」

リゼは気まずい思いで言い、女官に先に進むように促した。

大人しく歩きながらも、心の中はざわめいて落ち着かなかった。

ミアや里のみんなが信じていた話は、本当にただの物語に過ぎなかった。

きっと、王都では幼子に聞かせるような作り話で、信じてる大人なんていないのだろう。

ソフィアと女官が一瞬見せた複雑そうな表情が、そう語っていた。

（きっと、何も知らない田舎者だと思われてる……）

暗い気持ちになり、溜め息が漏れそうになる。

七つの宮に住む妃が、正妃の座を競い合うというのも疑問に感じた。

宮の配置からして、妃達の間にも差が有るのは明らかだった。

正妃の一ノ宮は別として、唯一の出入り口の門と王の住まいに近い二ノ宮を与えられた者が一番有力な妃候補。

そして、一番遠くに有る七ノ宮を与えられる自分が一番どうでもいい候補。

（……私がここに居る意味って、あるのかな？）

存在意義が分らないと、不安にもなるしむなしくなる。しばらく歩いて行くと、大きな建物が見えて来た。

「こちらが、二ノ宮でございます」

女官の視線の先では、回廊が枝分かれしていた。

その内の一つが、二ノ宮に向かっている。

二ノ宮は先程見た一ノ宮よりも建物自体は大きかった。

白を基調とした一ノ宮より、金、銀、紅などの色が多彩に使われており、華やかさの極みだった。

二ノ宮の周りに咲く花は、種類こそ違っていたけれど赤色に統一さ

れていた。

「……」

先導の女官が立ち止まる事は無かったので、リゼも興味を覚えながらも黙って先に進む。

続く宮はそれぞれ趣向の異なった雰囲気になっていて、同じ後宮に有るのが不思議だった。

宮と宮との間も想像以上離れていて、これでは他の妃候補と顔を合わす事はめったに無いのではと思うくらいだった。

これ程広大な後宮が、出入り出来ないような壁と門で隔離されてるなんて信じられなかった。

（建物の配置を把握するのに、何日もかかりそう）

そんな事を考えてると、突然女官が歩みを止めた。

ぼんやりしていたからか、危うくぶつかりそうになる



なんとか踏みとどまったりゼに、女官が頭を下げながら言った。

「これより、七ノ宮でございます」

その言葉に、自然と鼓動が早くなった。

再び静かに進んで行くと、白い壁の建物が見えて来た。

近付いて行くにつれ、全体の様子が見えた。

## 七ノ宮

回廊の終点に有るその宮は、白い壁の小さなひっそりとした宮だった。

今まで見て来た宮より一回り以上小さく、そして他の宮から特に離れているせいかととても静かだった。

他の妃候補が住む宮に比べると、明らかに見劣りする。

けれどリゼは、初めて見る七ノ宮を気に入った。

庭園に植えられた木々や花は、白を基調としてその中に僅かに薄桃色が混じっている。

こじんまりとしているけれど、その分全体を把握しやすく住みやすそうだった。

一番良いのは静かなところ。

出来れば、他の妃候補と必要以上の交流を持ちたくないと思っている。

だから、わざわざこの外れの宮に来る妃はいないだろうと思うと、気が楽になった。

女官に案内され、リゼの私室になるという完璧に整えられた部屋に入った。

居間となる部屋と続きの間の寝室。

小さな宮と言っても、リゼの感覚からすると一人で使うには広過ぎる部屋だった。

用意してある調度品も素晴らしい物で、使うのを躊躇ってしまいそうだ。

部屋を見て回っていると、ソフィアが近寄って来て言った。

「リゼ様、お疲れでしょうがこれから女官長とお会い頂きます。それからリゼ様付きになる女官との顔合わせをお願いいたします」

「女官長？」

「はい、後宮の女官を取り纏めている方です」

ソフィアの言葉に、リゼは納得したように頷いた。

それから、ふと思いついた様に言った。

「そういえば、ソフィアは後宮の女官なのですか？」

サランまで使者として迎えに来た事や、身にまとう雰囲気は他の女官と異なっている様に見えた。

でも、限られた人間しか入れないという後宮に当たり前のように入り、こうしてリゼに付き従っている。ソフィアは一瞬の間を置いてから、リゼの問いに答えた。

「今までは王宮の文官でしたが、この度七ノ宮付きの女官になりました」

「えっ？ どうして?!」

思わず声を上げてしまった。

ソフィアの眉根が僅かに寄った。

「上官からの命令です。今後は七ノ宮の妾妃様にお仕えするようにと……誠心誠意お仕えいたしますので、よろしくお願い申し上げます」

ソフィアは腰を折り、深々と頭を下げた。

その姿をリゼは釈然としない思いで見下ろした。

（どうして、文官から後宮の女官に？ しかも一番立場の低い私付きなんて……）

「リゼ様？」

ソフィアが探るような目を向けて来る。

「いえ……. よろしくお願いします」

湧き上がる疑問を飲み込みながら、リゼは掠れた声で答えた。時間を置かずに、女官長は、七ノ宮にやって来た。

女官長は年は40を超えたあたりで、両親よりは若く見えるけれど、その物腰には十分過ぎる程の貫禄が備わっていた。

女官長はリゼに頭を下げながら、僅かに目を細めて見つめて来た。

値踏みされているようで、落ち着かない気持ちになる。

けれど心配とはうらはらに、女官長は余計な事は一切言わず、大まかな後宮の決まり事などをリゼに話して聞かせた。

一通り話が終わると、女官長は一呼吸置いてから言った。

「後の細かい事はソフィアが説明いたします。  
長旅でお疲れでしょうから今夜はゆっくりとお休みください」

「……はい」

リゼが短く応えようと、女官長はお付きの女官を引き連れて七ノ宮から去って行った……最後まで、少しの笑みも見せる事なく。

リゼが、緊張を解くように息を吐くと、今度はソフィアが近付いて

来た。

すぐ後ろに、若い女官を従えていた。

「リゼ様、こちらはメイといいます。」

リゼ様の身の回りのお世話をさせて頂く事になります」

ソフィアがそう言うと、メイはしっかりとした礼儀作法で頭を下げた。

「メイと申します。心を込めてお仕えいたします」

「あつ……リゼです……こちらこそよろしくお願いします」

メイの日焼けした事が無いような白い肌に、艶やかな黒い髪はどこかの令嬢のようで……自分より余程妃に相応しいんじゃないかと思った。「リゼ様には、こちらののプリムラの花の香料が似合うと思います。」

髪に塗り込んでもいいですか？」

「……はい、お願いします」

お嬢様に見えたメイは、印象とは違いよく動き甲斐甲斐しくリゼの世話をやいてくれた。

入浴後の髪の手入れや爪の手入れまで、部下の侍女を使いつつ手早く、それでいて丁寧に行っていく。

爪の手入れも、髪に香料を使うのも初めての事だった。

リゼは大人しくメイに従い、肌の手入れまで終えたメイが満足そうに微笑むのを黙って眺めていた。

使った香料などの片付けは侍女に任せ、メイは今度は温かいお茶を用意してくれた。

「……………ありがとう」

ニコニコと微笑むメイからお茶を受け取り、口にする。

ほのかに果実の香りがするそれは、城に到着してから続いていたリゼの緊張を和らげた。

「メイは何才なの？」



メイの持つ明るい雰囲気も手伝って、率直に聞いていた。

「先月、十七になりました」

メイは屈託無い笑顔で答える。

「私の一つ年下？　メイは後宮で働いて長いの？」

同年代という気安さもあり、勢いづいて問いかける。

ソフィアや他の従者に対して持っていた警戒心が、メイの前では緩んでしまう。「私は後宮のお勤めは、初めてです」

「じゃあ、今までは何を？」

「実家で行儀見習いをしていました」

「実家？　メイの家は王都に有るの？」

「はい、父は国王陛下の側仕えの文官です」

「えっ、国王陛下の？　それならメイのお父さんは貴族なの？」

国王の近くに仕える事が出来るのは、貴族だけだと聞いている。

驚き声を高くするリゼに、メイは自然に微笑みながら答えた。

「はい、下級貴族ですけど」

「……そうなの」

やはり、先ほど感じたメイに対しての印象は間違ってた。

なにしろ貴族の姫だったのだから。

そんなメイが自分に仕えるなんて、どう考えても違和感があった。

「ねえ、メイは私が後宮に呼ばれた理由を知ってる？」

「えっ?!」

驚いた様子で目を丸くするメイに、リゼは真剣な表情で言った。

「メイは私が王都から遠く離れたサランから来た事を知ってるでし

よ？ どうして貴族でもない小さな里の娘の私が選ばれたのか不思議で仕方ないの」

メイは困惑した表情を浮かべながら言った。

「私は……国王陛下がリゼ様を選んだものだと思っていました」

「……どうして？」

「陛下は時折王都から離れた地にお忍びで出かけていたそうです。今回リゼ様が選ばれたと聞いた時、陛下は遠くの地で恋仲になった方を呼び寄せたんだと思いました」

「……」

メイのあまりに思いがけない言葉に、リゼは驚きのあまり言葉を失った。「リゼ様？」

メイが心配そうに様子を窺って来る。

リゼは無理に笑みを作りながら応えた。

「その話は間違っているわ。私は国王陛下と会った事はないの。顔だって絵姿で知ってるだけ」

「えっ？　では……どうして……」

メイも戸惑いを隠せないような表情で呟く。

「不思議でしょ？　だから私も気になって仕方ないの」

リゼがため息まじりに言うと、メイはハッとした表情になり、それから気を取り直した様に言った。

「私には分かりませんが、必ず何か理由が有るはずです。陛下の妃となる方を適当に選ぶはずが有りませんから」

「……そうなのかな」

「はい、心配される事は無いと思います」

メイは明るく言い、お茶のお代わりを注いでくれた。

「ありがとう」

結局、何も分からなかったけれど、メイには大分打ち解ける事が出来て、リゼはホッとした気持ちで新しいお茶を口にした。それから

しばらくメイと会話を交わしてから、侍女達が整えてくれたベッドに入った。

「お休みなさいませ」

メイが灯りを落とし出て行くと、広い部屋の中は怖いほど静まり返った。

同じ建物の中にメイや数人の侍女が居るはずなのに、少しも気配を感じない。

長旅と緊張で疲れているはずなのに、頭が冴えてしまってなかなか寝付けなかった。

何度目かの寝返りで、リゼは無理に眠る事を諦めて身体を起こした。

そのままベッドから降り、月明かりの照らす窓辺に足を進めた。

「……………綺麗」

庭園の白い花々が月の光を受けて、ほのかに輝いている。

満月のせいか、夜の闇の恐怖を感じなかった。

時折吹く風に揺れる花々を見ると、サランの里の事を思い出した。

夜中に家を抜け出して、カイと二人で花咲く河原を歩いた事があった。

あれはまだ一年前の事なのに、遠い昔の事のように感じる。

懐かしく眺めていたりゼは身を翻して部屋の中に戻ると、すぐに戻って来て今度は庭に降り立った。

どうせ眠れないんだし、庭を歩いてみたくなった。音を立てないように、庭の中をそろそろと歩く。

甘い花の香りが辺りを漂う。

白く輝く庭はとても幻想的だった。

ぼんやりと辺りを見て回っていたりゼは、不意に強い視線を感じて

足を止めた。

（……メイ？）

リゼが部屋から居なくなっている事に気付いて、探しに来たのだろうか。

そう思いながらも、本能的に用心する気持ちになり声を出さずに振り返った。

「……！」

視線の先に居たのは、黒い衣装を身にまとった男だった。

もし月の光が無ければ、夜の闇に溶け込んでしまいそうな。

「だ、誰？」

この庭に人が……それも男が居る訳が無かった。

遠く離れた後宮の門は、屈強な衛兵達が守っている。

それに、この七ノ宮の入り口にだって、数人の腕の立つ女官が見張りに立っていると聞いていた。

怪しい人間が出入り出来る訳が無いのに……。

（まさか、盗賊？……それとも……）

恐怖を感じながらも、リゼは羽織っている上着の内側に手を入れた。

庭に出て来る時、里にいた時からの習慣で持ってきた小剣の柄をしっかりと握る。

息も出来ないような緊張の中、音も無く近寄って来る男に向かって剣を抜いて身構えた。歩み寄って来ていた男が、驚愕の表情を浮かべ足を止めた。

「……」

油断なく構えていたりゼは、月明かりに照らされた男の顔を認めた瞬間、驚きに息をのんだ。



男の顔に見覚えがあった。

（そんな、まさか……）

動揺するリゼの様子に気付いたように、男は一気に距離を縮めて来た。

「……あっ！」

反応するより早く剣を取り上げられ、逆に刃先を突きつけられる。

「……ここで何をしている？」

男は低く響く声で言いながら、威嚇するような目でリゼを見た。

その声が耳に入ると同時に、夢から覚めたように我に返った。

「……あ、あなたこそ一体誰なの？」

そう口にしながらも、なんとか逃げ出そうとする。

けれど、男には一部の隙も無く身動きがとれなかった。

リゼの言葉に、男は一瞬意外そうな表情を浮かべ、それから何を思ったのか剣を下ろした。

「……………」

男が次に何をするつもりなのか、予想がつかない。

恐怖に身体を強張らせるリゼを、男はじっと見つめて来た。

「……………お前は……………」

男が再び口を開いた。

それと同時に、

「リゼ様?!」

メイの叫ぶような声が聞こえて来た。「あつ……………待って!」

メイが近付いて来る気配を感じたのか、男はリゼの剣を捨て身を翻し庭園の奥に走り去って行った。

剣を拾い追いかけようとした時には、もうどこにも姿は見当たらなかった。

風で木々が、ザワザワと揺れる音だけしか感じられない。

キヨロキヨロと周囲を見回していると、メイが近付いて来る気配を感じた。

立ち尽くすリゼを見つけると、慌てた様子で駆け寄って来た。

「リゼ様！ どうしてこんなところに……えっ？ それは……」

メイはリゼの手に握られた剣を見ると、顔色を変えた。

「寝付けなくて庭に出たの……これはつい習慣で……サランに居た時は夜の一人歩きの時には必ず持つように言われてたから」

「そうですか……お部屋にいらっしやらないから心配しました」

「ごめんなさい心配かけて」

「いえ……あの、リゼ様、今誰かここにいませんでしたか？ 話声が聞こえた気がしたんです。それにリゼ様の待ってと叫ぶ声も……」

「えっ……あの、人がいるような気がしたの……だから驚いて剣を抜いて……でも気のせいだったのかもしれない」

咄嗟に嘘をついた。

メイにも今見た男の事を話したくはなかった。

少なくとも、男の正体をはっきりするまでは。

（あの男の顔……カイにそっくりだった）

とても他人とは思えない程に。

違うのはリゼを見据えた時の瞳の冷たさと、それから低く響く声。

（あの男は一体誰なんだろう、後宮に入り込むなんて……）

そして、門から更に遠くの方角に消えて行った。

何もかも、分からない。

けれど、カイと全くの無関係とはどうしても思えなかった。

## 二ノ宮の妃

翌日。

朝早くから、メイに手伝ってもらい念入りな身支度をした。

衣装等は、全て揃えられていた。

誰が選んだのかは分からないけれど、全体的に薄い色使いの物が多く、どちらかというと可愛らしい雰囲気のも物が殆どだった。

今、リゼが身に付けているのも、淡い桃色と白の生地を使ったもので、襟にも袖口にも惜しみなくレースが使われているものだった。

（これ……私に似合うの？）

特に服装に拘る方では無いけれど、自分のイメージとかけ離れているような気がして落ち着かない気持になる。

けれどメイは違和感を持っていないようで、テキパキと衣装に合わせた装飾品を選ぶと、次は髪を整え始めた。

背中の中ほど迄有る髪を、メイは器用に結び上げてくれる。

昨夜念入りな手入れをしてもらったからか、髪はいつもより艶やかで櫛通りも良い。

後れ毛を残した髪形にして、まとめ上げた髪に幾つかの髪飾りを差込むとメイは満足そうに微笑んだ。

「リゼ様の髪は美しいだけでなく、強くしなやかですね」

「えっ……そう?。」

そんな事思った事も、言われた事も無かった。

「はい、とても綺麗な亜麻色の髪です」

メイは微笑みながら言い、化粧の準備を始めた。

「衣装に合わせて、薄桃色を使いますね。リゼ様の白い肌にきつと似合います」

「……」

女官というのは、相手を褒めて持ち上げるのも仕事の内なのだろうか。

そう思ってしまう程、メイはリゼの事を何かと褒めた。

（それとも、元氣付けてくれてるとか？）

昨夜、メイに不安をぶつけてしまっていた。

なぜ自分が妃候補になったのか、納得出来ないでいると……。

それに部屋を抜け出した事も、メイは気にしているようだった。

部屋に戻った後、二度と黙って出て行かないように念を押されたし、剣の扱いも注意された。

護身用に使ってるのは構わないけれど、王の前では持つ事は許されないという事。

それから近い未来、王が七ノ宮に渡って来る時は、寝所に武器に成り得る危険が有る物は一切置いてはいけないとメイは語った。



（王の渡り……）

メイが何気無く口にしたその言葉は、リゼを重く暗い気持ちにさせた。あまり考えないようにしていたけれど、いずれは王に身を任せなければいけない。

それはとても苦痛で、恐怖すら感じる事だった。

相手がいくら王でも、見知らぬ男と同じ寝台で眠るなんて、今のリゼには現実の事として考えられなかった。

（……私は覚悟が足りなかった）

里を出る時は、仕方ないと諦めて受け入れたつもりだった。

けれど、昨夜の不審な男との出会いで気がついてしまった。

何の覚悟も出来ていなかったんだと。

あの男の顔があまりにカイに似ていたから、忘れようとしたはずの気持ちが蘇ってしまった。

（カイを忘れられない……）

それなのに、王の言いなりにならなくてはいけない。

逆らう事も許されない。

「終わりました」

メイの弾むような声が聞こえて来て、リゼは閉じていた目を開けた。

鏡の中には、まるで別人のように華やかに飾り立てられた自分があった。

「……ありがとう」

メイにそう言い微笑みながらも、憂鬱な気持が晴れる事は無かった。支度が終わったのを見計らったように、ソフィアがやって来た。

リゼの姿を確認するような目で見てから、ソフィアは言った。

「今から二ノ宮に向かいます。各宮の妃候補の方が集まっていますので、ご挨拶をして頂きます」

「はい……」

リゼは緊張感を持って頷いた。

ソフィアの先導で、長い回廊を渡り二ノ宮へ向かった。

各宮の雰囲気に合わせてある、様々な色の花々を横目で見ながら歩いて行く。

かなり歩き続け、ようやく二ノ宮の入り口に辿り着くと、ソフィアはりゼを振り返り言い聞かせる様にした。

「妃候補の方は皆強い個性をお持ちですが、特に二ノ宮の主であるエリス様は厳格な方です。

くれぐれも言動にお気をつけ下さい」

「……はい」

答えながらも、妃候補の女性について詳しく聞いておかなかった事を、今頃後悔していた。

メイがソフィアに聞けば良かったのに、他に気がかりが多くて先延ばしにしまっていた。

けれど、二ノ宮を与えられたという事は、一番正妃に近い存在なんだろうと考えられた。

大貴族の令嬢かもしれない。

きつと、気位が高くワガママなんだろう。

そんな人の怒りは、わざわざ買いたくなかった。巨大な二ノ宮の奥深くにある広間に、五人の妃が集まっていた。

二ノ宮の主であるエリスを中心に、皆、高い背もたれのついた椅子に座っている。

自分もずいぶん着飾っていると思うけれど、他五人の妃達はそれ以上で、皆それぞれ個性に合わせた煌びやかな衣装を身に着けていた。

特にエリスの豪華さ、存在感は別格で、知らない者が見れば彼女は間違いなく正妃に見えると思った。

目の前に広がる光景に圧倒されていると、エリスの方から声をかけて来た。

「この二ノ宮の主、エリスです。  
あなたが昨日七ノ宮来た人ね」

エリスはリゼの、些細な表情も見逃さないような鋭い目をして言う。

明らかに観察をして、値踏みしてるんだと分かった。

良い気分では無かったけれど、先ほどのソフィアとの会話を思い出して、礼儀作法に則って挨拶をした。

「本日はお招きありがとうございます。リゼと申します、よろしく  
お願いいたします」

ある程度の作法は、母から習っていたけれど、こういう場で通用するか心配だった。

けれど、エリスはリゼの態度について、顔をしかめる事も、何か言う事もなかった。

代わりに別の質問をされた。「昨晚は、王のお渡りは有ったの?」

「えっ?……いえ、有りません」

思いがけない質問に動揺しながら、なんとか答える。

リゼの言葉に、エリスは僅かに目を細くした。

「……本当ですか?」

「はい」

すぐに、真実だと証明するように頷いてみせた。

エリスは納得のいかない様子ながらも、リゼに質問の意図を説明するように言った。

「昨夜は本来の順番からすると、五ノ宮のリユート殿のところへお渡りが有るはずでした。

それが突然無くなったから、王はあなたの宮に泊まったのかと……」

エリスは少し離れた位置の椅子に座っている、銀髪の女性に視線を

向けながら言った。

リユートと呼ばれた女性は、特に表情を変える事なくリゼを見つめて来た。

自分と大して年も変わらないと思われる、五ノ宮の妃は特別美人では無いけれど、独特の……どこか神秘的な空気をまとった人だった。なんと答えれば良いのか、分からなかった。

エリスの口調はどこか責めるようだけれど、自分は嘘を言っていない。

悪い事をしている訳ではないんだから、謝る必要は無いと思った。

かといって、知らないと言い捨てる事も出来ない雰囲気だった。

「リゼ殿？」

しびれを切らしたようなエリスに、名前を呼ばれた。

「……本当に国王陛下はいらっしゃってません。昨夜は女官長と会った後すぐに休みました」

他に言いようが無く、そう言ったけれど、エリスも他の妃候補も皆信用出来ないような目でリゼを見ていた。

ただ一人、リ्यूトだけは、何を考えてるのか分からない無表情のままだった。

「……昨夜、陛下が後宮の門をくぐったと報告が有ったのです。それなのにどの宮にも立ち寄りなかった。不思議な話です」

エリスはそう言いながらも、リゼが嘘をついているとも言つように、疑いの目を向けて来た。

「……」

居たたまれない気持ちになりながらも、内心驚きでいっぱいだった。

エリスは王の行動を、ずいぶんと細かく把握しているようだけれど、何故なのだろう。

それに王が誰と過ごしたかが、これほど問題になるなんて思っていなかった。「後宮の外にも、私の配下の者が何人かいます。あなた



が隠そうとしても、すぐに情報は入って来るのです」

エリスは、リゼの心の内を見透かしたように言った。

「隠してなんていません」

リゼの言葉に、エリスは無表情で頷くと話題を変えるように言った。

「分かりました、ではこの話は終わりにします……これから各宮の正妃候補を紹介します。まずは三ノ宮の……」

エリスは淡々と言い、隣に座っている見事な金髪の美女に目を向けた。

それから次々と紹介は進み、ようやく対面が終わった頃にはリゼはすっかり疲れ果てていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4937ba/>

---

七つの宮～六番目の妃～

2012年1月14日20時55分発行